

Title	藤田亮策著, 朝鮮の歴史
Sub Title	
Author	和田, 博徳(Wada, Hironori)
Publisher	三田史学会
Publication year	1953
Jtitle	史学 Vol.26, No.3/4 (1953. 6) ,p.156(302)- 157(303)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19530600-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る。第二卷の經濟的秩序に於ては年代的に三章に別け、更にその中で五項目に別けたことは、通讀して受ける印象が散漫であり、第一卷ほどの感激を興へられなかつた。歴史の著述に當り項目別に書くか、年代的に書くかは難かしい問題であり、特に經濟問題に於ては書かねばならぬ項目が多くありすぎるため、綜合的に書くのは困難なる業であることは明らかであるが、經濟問題は相互に關聯するものであるので、綜合的に書かれた方がより讀者をして理解を容易ならしめたと考へられる。然し之は隨を得て蜀を望むが如きものであつて、勿論本書はソヴィエツト研究の最上級に屬するものであり、現代史ソヴィエツト史に關心を有するものの必讀の書であり、現在の情勢に於ては、ソヴィエツトを理解するために、一般人によつても讀まるべき書である。第三卷は著者の専門とせられる國際關係について書かれるとのことで、それに對する期待は大である。

(田中荊三)

藤田亮策著 朝鮮の歴史

昭和二十八年三月 福村書店

我が國と最も密切な關係にある朝鮮の歴史を知ることには我々日本人として必要なことであり、且つ義務でもあらう。然るに世人

の朝鮮史に關する知識は殆ど無いと言つてもよい程である。これは戰前、朝鮮は日本の一部であるといふ理由で、東洋史教育から除外され、そして國史教育からも省かれてゐたといふやうな事情にも依ることと考へられるが、更に戰前戰後を通じて、一般向の適當な概説書が少く、入手し難かつた故ではなからうか。かゝる意味に於いて、この度び朝鮮史の權威にして、本塾でも講筵を開かれてゐる藤田亮策氏が本書を著はされたことは大いに歡迎されなければならぬ。

本書は目下刊行されつゝある福村書店の「アジアの歴史文庫」全十二冊の一で、元來、中學生を對象にして著された百二十頁餘の小冊に過ぎない。しかしそのために内容の程度を落してあることなどはなく、寧ろ從來の研究成果を見事に取り入れて、壓縮し結晶せしめたとも言ふべき感さへするのであつて、朝鮮史の入門書として正に恰好の書であると思ふ。こゝに敢へて本書を紹介する所以である。

本書はその内容を一、朝鮮半島 二、有史以前 三、樂浪の文化 四、古代國家 五、新羅の時代 六、王氏高麗 七、李氏朝鮮 八、日本と朝鮮 の計八章に分つてゐる。この中、一、朝鮮半島 では朝鮮の名稱・位置・地勢・風土などについて述べ、最後の八、日本と朝鮮 には日鮮兩民族の親縁關係を民族・言語・歴史等の諸方面から強調してをり、他の二、有史以前から七、李

氏朝鮮に至る六章に於いて朝鮮史の流れが脈絡一貫して述べてある。何れの章も極めて簡単に要領よく、重要事項は殆ど洩れなく載せてあり、而も大家の圓熟せる手に成つた好讀物で、眞に一讀して卷を置く能はずといふ趣がある。しかし本書の特色として第一に擧ぐべきは政治史よりも寧ろ文化史を中心に説いてゐることであつて、石器文化を始め、樂浪の文化や高麗の佛教文化、青磁等々の朝鮮の古文化遺物についての正確な知識が容易に得られるのである。なほ各時代の社會制度などについても多くの記述がなされ、例へば新羅の滅亡とともに以前の嚴格な階級制度は崩れ、高麗になると、王を首め功臣も皆、氏も無い庶民であつたことなどが特に興味深く語られてゐる。更に本書が全體を朝鮮民族の歴史でなく、朝鮮半島の歴史として採り上げてゐる點や、總督政治に對しても妥當な評價を與へてゐることなどは著者の史家としての見識を示すものと見ることが出来る。

なほ望蜀の言を述べさせて頂くならば、李朝や日本統治時代などの近世史にもつと多くの頁を割いて欲しかつたやうに思ふ。また匆卒の筆の滑りや誤植のやうなものも若干見受けられるが、それらは皆、いはゆる白璧の微瑕であつて、本書の眞價は聊も揺がないこと勿論である。東洋學が世間からあまり顧みられぬ今日、かゝる一般向の讀み易い良著が續々として刊行されることを希望して已まない。

(和田博徳)

書

評

女性の軍使

内戦外戦をとわず開城し敵の軍門に降る時に軍使を送つた例は古今に多々あるが、女性の軍使と云うべきは稀である。戊辰役東奥戦で福島縣湯長谷ユナガヤの攻略に際し城主の母親が降服の使として單身で官軍參謀の營地に赴いてゐる。女性なれば途中の危害なく無事目的地に達するものと考えた爲であらう九州柳河藩士で同戦に活躍した伊藤貞承が陣中矢立の筆で記した横綴の小帳面二冊を令孫東一郎君の厚意で一讀したが、所謂官軍の進撃と奥州諸藩の抗戦狀況が手に取るように窺われ、其の中に、

六月、一同廿九日早天ニ濱手通薩州備州大村より湯長谷歟進行、山手ニ佐土原柳河苦也、然處參謀より使番參平瀉表ニ賊舟三艘參候ニ付柳河引揚可有之旨達相出、直平瀉表引返と相成、山手者佐土原一手也、追々進行最早湯長谷近邊と相成、二手より大砲小砲打懸新手入替ノ攻登リ、賊茂兼而用意之事成共品替大ニ防たり、雖然官軍いきも不繼入替ノ戰烈敷事なれ共、敵益兪足相成味方者益進加なし、以外晝九ツ頃落城相成候處、城中より壹人駈來候者有之參謀之方參る、女ニ者有之候得共降參相願ニ付、賊者岩城平駈込けり、此女内藤長壽丸公母なり承る。(原文のまゝ)

(武田勝藏)